

---

# 隔離東京

勝

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

隔離東京

### 【Nコード】

N7259S

### 【作者名】

勝

### 【あらすじ】

楽しいはずの修学旅行が悪夢に！！

我々白金中学校は片田舎の真ん中に位置する普通の学校である。

早朝5時頃

ブロロロと煙をマフラーから噴出しながら微量ながらも上下に揺れるバスに制服をきた男子女子が

次々乗り込んでいく。

その後ろを兼田 光は悠々と親友の榊田 慶介と同じくしてバスに乗り込んだ。

兼田の性格には一つ特異点がある。

それはあまりにも冷静で無表情であること。

笑うことも怒ることも泣くこともない。

そんな氷のような男兼田とは反面親友の榊田はかなりのお調子者。いつも、いつまでも一日の内大半はニヤニヤと変態染みた笑みを見せ続ける。

最も彼の親友は既になれているのか・・・呆れる様子もない。

行き先は東京。

片田舎にある白金中学の校門をまだ日も昇りきらない朝から一台のバスが通りすぎていった。

楽しい2泊3日の旅はじまったのだ。

¥ \$ ¥ \$ ¥ \$ ¥ \$

速さの軌道に乗り切ったバスは少し街にある高速道路を乗り込もうとしていた。

ピンポン・・・500円 利用しました」

ETCのアナウンスがザワザワと話す生徒の声を遮った。

しかし、生徒達にとってはそれは単なる声に過ぎず、一度も話し声が途絶えることはなかった。

だが、相変わらず無表情の兼田は窓越しに写る自分の街を見つめていた。

100kを越え、どんどんと東京へと駒を進めるバス。

車内は依然変わらず話し声がしていた。

「イエーイ!!!!!!」

変わらずハイテンションな栴田はバシバシと兼田の背中を叩き込む。  
「今日こそはお前の実態に迫る」と兼田にとつては非常にどうでもいいことを栴田はたんと口にした。

しかも、その手にはなにやらインスタントのカメラが握られている。  
<バカ>

心の中では感情を露わにする兼田だがやはり表情はどこか硬い。

車内の声はやがてこの広大な地球に漏れ始めた。

話続ける生徒とは反面教師陣、兼田は東京に一つの異変を感じる。

活気がない……

誰もいない……

もはや白金の生徒、教師は不安に飲み込まれた。

「う・うわああああ」

パニックの声が誰もいない町の真ん中に響く。

「な・何??」

一人の声のせいで様々なところから声が出始めた。

バタバタと筆記用具やら入った鞆を背負いなが教師も含め皆が一斉に走り始めた。

「おい!!!お前も行くぞ」

ぐいぐいと引つ張る栴田を余所に兼田は一言だけ呟いた。

「みんな死ぬ」

とみんなが逃げていった方向とは違う、もっと都心部のほうへ歩を兼田は進めた。

しばらくすると生徒の大半が逃げた方向から銃声なり響いた。

通常なら悲鳴を上げるが声がまったく聞こえないという辺りから皆殺されたと推測できる。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

沈黙の中相変わらず無表情で歩を進める兼田。

非常事態をあつて、緊張した顔つきでとてと後ろをつく梶田。

「・・・・・・」

「なあ・・・・・・」

初めに沈黙を破ったのは梶田だった。

「何？」

必要最低限なことしか言わない兼田。

「これからどうするよ？」

「今の東京は隔離されてる」

「んなことは分かる端まで逃げりや死ぬだけだ」

先刻の生徒達のように死ぬわけには行かない二人。

しかし、今の東京は必ず何かある。

そっくいいきれるほど不気味な空気を放ち続けた。

徐々に生臭くなる周囲。

警戒のすべか鞆から一丁のショットガン？らしき黒い物体が出る。

「おい・・・・それ銃？」

恐る恐る聞く梶田を見て、コクリとうなずく兼田。

一体どこから来るにおいなのだろつか。

二人の疑問はすぐに消えた。

死体、死体、死体、死体

それは死体、又は遺体とも言つ。

その周りを蠅が飛び回る。

「みいーっけ」

不気味な声が二人の心を刺す。

「・・・・・・」

そりそり後ろを向くと山賊？の一団が現れた。

彼等曰く生き残った人間は自分等だけだという。

普通には分けの分からない話としてどんな人間も無視をするような

ことも今の状況を見れば否定は出来ない。

「ガキから金をもらうにゃーちと心も痛むが・・・」

「ガハッ!!」

その場に倒れこんだのは山賊の一人だった。

また一人、また一人と山賊たちは倒れていった。

そこには山賊の首を弾の入っていないショットガンでしめる兼田。

「くっ!!」

3人近くいた山賊はあつけもなくその場に倒れこんだ。

柵田としては兼田が強いという一つの事実があるのだが、兼田はそんな柵田を見かねて一言はなった。

「単純に都心にいれば生き残れる・・・」

相変わらず硬い表情を浮かべながらさらに東京のまんなかに進んでいった。

東京タワーの付近であるのか・・・東京タワーの支柱は既にポツキリと折れていた。

「ここが日本の首都とは・・・」

まずここが日本なのかと疑問が残る街中を二人は緊張した顔で歩き続けた。

薄い霧が太陽を掠める。

それもその霧はどこか黄色い色をしている。

不気味さをさらに引き立てているその霧はさらに二人を不安に落とす。

「なんで霧がこんなに黄色なんだ？」

「単純に太陽が上に昇ってるからだ」

二人の口からはそのような軽口がたたかれているが実際は違った。それも当たり前だ。

先刻の山賊を除き、原型を留めた人類は兼田と柵田以外どこにもいなかった。

キョロキョロと辺りを見回すのあるのは死体だけ・・・

「気味が悪い・・・」

ゴクリと生唾を飲み込む柊田を横目でチラリと見てとあるビルに誘導した。

「このビルになんかあるのか？」

「ここなら東京が一望できる」

ビルは50階までとから東京を一望するのは容易であろう。

しかし、科学とはまったく役に立たないときもある。

普通なら50階ぐらい、エレベーターに乗り、ボタンを押せば一気に行くことが可能である。

だが、今は機械など微塵も動く気配がない。

結果階段を上りきり、一望できる地に到達した。

だが、結局いるのも死体だと安心しきってショットガンをおろす兼田。

そして二人はそのまま展望台のようにガラス張りのオフィスの奥に進んで行った。

「これが東京？」

地上からはさっぱり、分からなかったが東京の端の方に巨大な壁がそびえ立っていた。

<普通国も気づくだろう？>

だが、救援のヘリや地上部隊らしきものは全く感じられない。

<ここにいる敵兵は日本じゃ手におえないのか？>

「行くぞ・・・」

まじまじと外を見ている兼田を見て、柊田は先に戻り始めた。

「う・・・うわああ!!」

バツと振り返るとそこには死体の一人が動いている。

「ちっ！」

ガブッ

ポタリポタリと地面に地が落ちる。

「・・・か・・・兼田」

声のでない柊田の目の前には腕を喰いちぎられた兼田と先刻の動き

出した死体。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7259s/>

---

隔離東京

2011年4月24日23時10分発行